The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

有部における自性について

阿　部　真　也

仏教におけるダルマについての研究は，今までに数多くあり，本論考も，それにつながるものである．特に，ダルマとセットで考えられることが多い「自性」について，有部の論書によって考察を加えていきたい．中心とする資料は『倶舎論』[1]と『順正理論』[2]である．

1．関係する諸語

まず，『倶舎論』によって「自性」の原語等を見る事にする[3]．「自性」と漢訳された原語はsvabhāvaが最も多いが，他に，ātman, svatas, jāti, nija, prakṛti, svagotra, svabhāva-vikalpa, svabhāva-smṛty-upasthānaがある．その割合から見て，「自性」の原語は，ほとんどの場合svabhāvaであると言える．逆に，svabhāvaの漢訳語を見ると次のようである．新訳は「自性，性，体，自体，体性，自相，法体，実」，旧訳は「性，自性，体性，体相，自，自体，法体，相，自性類，性類，類」とある．これらのうち，svabhāvaが原語となっていることが多い語は，「自性」を除くと，「性」と「体」の二つである．「体」の原語はsvabhāva以外に，artha, ātman, ātmabhāva, dravya, dravyatas, dravya-bhāva, dharma, bhāva, śarīraがある．「性」についてはsvabhāva以外に，ātmaka, ātmakatva, gotra, gotraka, gotratas, gotratva, dhātu, prakṛti, pratyayatā, bhāva, śīla, svabhāvatva, svarūpatvaがある．また，他にsvabhāvaと関係の深い語，時として意味の重なってくる語として，svalakṣaṇa，などが挙げられる[4]．以上のように，関連する語は多く全てをここで検討することはできない．本論考においては「自性」と漢訳された語を中心に検討していきたい．

2．『倶舎論』における用例

まず，倶舎論にあるsvabhāvaの用例を挙げる事にする．最も多い使い方は次のようなものである．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1　虚空は障礙がないことを自性(svabhāva)とし，そのなかでは色が動く．(p.3 l.23)(新訳: 性，旧訳: 性)

ここでは，性質や本質といった意味で使われている．このように，様々な語について，「…を自性とする」あるいは「…を自性とするものではない」，「…の自性は何であるか」という使い方をしている．他の例を幾つかあげておく．

2　色と作用を自性（svabhāva）とする点は表（業）と同じであっても，他に知らしめないから無表である．(p.8 l.7)（新訳: 性，旧訳: 性）
3　それ故に動きを自性(svabhāva)とするダルマがすなわち風である．(p.8 l.22)(新訳: 自性，旧訳: 性)
4　これら意と根の律儀は何を自性（svabhāva）とするのか（新訳: 自性，旧訳: 自性）．これらは，無表の戒を自性（svabhāva）とするものではない．(p.208 l.23)（新訳: 自性，旧訳: 性）．
5　無間（業）は何を自性（svabhāva）とするか．(p.260 l.13)（新訳: 体，旧訳: 体性）

これら最も多い形の用例からは，svabhāva の意味する所は汲み取れるが，どのようにそれら幾つもの svabhāva を区分すれば良いかは分からない．その区分の糸口となる記述をみることにする[5)]．

一つ目は，蘊・処・界についての記述の中に出て来るものである．蘊・処・界に全てのダルマが含まれる，とした後に次の記述がある．

6　この場合含まれると言う事は，それがいかなる（ダルマ）について言われる場合でも，次のように知るべきである．自性(svabhāva)をもつものに（含まれる）のであって他の性(parabhāva)をもつものに（含まれる）のではない．(p.12 l.8)（新訳: 自性，旧訳: 同性類）

一つのダルマが一つの自性を持つ時，他の自性を持つ事はない，ということである．「含まれる」というのは，例えば「眼根が色蘊・眼処・眼界・苦諦・集諦などの自性を持つからそこに含まれる」と説明しているように，特定の自性を持つ，ということである．また，旧訳を見ると，「同性類」となっている．ここでの意味を取った訳語になっている．なお，この文は頌であり，『順正理論』にも同じ文がある．後ほど，もう一度検討することにする．

二つ目は，心所法の記述の中に出て来るものである．いくつかの類似する心所法について違いを述べているのだが，その中で，尋（vitarka）と伺（vicāra）の違いを論じる部分に svabhāva が出て来る．

7　もしそうならば，尋と伺は共に粗さときめ細かさとの因であろう．あたかも水と日光とはバターの凝結と融合との（因である）がその自性（svabhāva）ではないよう

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

にである．(p.61 l.3)（新訳：体，旧訳：訳語無し）

ここに引用したのはヴァスバンドゥの有部に対する反論の部分である．有部は，尋は粗さ（audārika）を自性とし伺はきめ細かさ（sūkṣma）を自性としている，として，別々のダルマであると主張している．これに対し，引用を含めた部分において，粗さときめ細かさは相対的なものだから種類の別を立てるのはおかしい，と反論しているのである．すなわち，粗さときめ細かさという別々の自性を立てて区分するのは理屈に合わないとするのである．ここから，自性の別があれば種類も区分される，といえる．

前の６の引用と合わせて考えると，別々の種類である時，その一つ一つに対して別々の自性の区分がある，ということである．すなわち，自性の別によってダルマも分けられる，ということである．

なお，『倶舎論』には漢訳が二つある．それらを一部対照させてみたが，多くの場合，特に意味に応じた訳し分けはされてないように見える．

３．『順正理論』における用例

次に『順正理論』にみられる「自性」について検討していくことにする．『順正理論』は漢訳一つしかなく，原語を特定するのは困難である．『倶舎論』と対照させることによって特定できる部分もあるが，新訳と同じ玄奘訳であることから，同じ文になっていることが多い．また，「性」や「体」も使われている．ここでは，「自性」の語を中心に検討することにする．

まず，『倶舎論』と同じ頌について論じている部分を見ていきたい．そこには，「自性」が何度か出現する．第１章中の，蘊・処・界について論じている箇所である（pp. 342c–343a）．頌は『倶舎論』の新訳と同じであり，次のようである．

８　総じて，一切法を摂すること，一の蘊と処と界とに由る．
　　自性を摂して，余に非ず．他性を離るるを以ての故に．(p.342c)

先ほどは『倶舎論』梵本の頌の後半だけを挙げたが，ここでは前半部分も合わせて挙げた．ここでの「自性」の原語は svabhāva であり，他性は parabhāva である．意味は「色蘊と意処と法界とに全ての法が含まれる．それは，自らの本性を持つものに含まれるのである．他の本性とは別だからである．」となる．この頌に対する論は，『倶舎論』に比べるとずいぶん長く詳しいものになっている．ここに出てくる「自性」は，全て「自性を摂する」あるいは「自性の摂」という形で使われている．論全体の内容は「他性を持つものにも含まれる」という異説に対す

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る反論が基本となっている．

9　他性を持つものに含まれることを認めると，様々な矛盾が生じる．一つの法が生じる時に全ての法が生じる，一つの法が滅する時に全ての法が滅する，等である．故に諸法は自らの本性をもつものに含まれる．我が部の諸師もそのように自性の摂を説いてきたのである．(pp.342c–343a 抄訳)

というものである．この部分では，「自性と他性」の対比の形で使われることが多い．また，法の包摂は「自性」によって成立する，といわれる根拠となる部分でもある[6]．

ここまで見てきたものと違う使われ方をする「自性」もある．

10　法の生ずる時は，其の自体を並せて，九法俱起す．自体を一と為し，相と随相との八なり．本相の中の，生は其の自性を除きて能く親縁と為り，余の八法を生ず．諸法は自体に於いて，生等の用無きが故に，随相たる生生，親縁の用を為して，九法の内に於いて，唯，本生を生ず．此の一を生ずると，多を生ずるとの功能別なるが故に．生の性は既に異なること為し．功能，何ぞ別なること有るらんや．……(中略)……本相の中の住も亦，自性を除きて能く親縁と為り，余の八法を住せしめ，随相たる住住は，九法の中に於いて，唯，本住を住せしむ．……（以下略）(pp.406a–406b)

四相について論じている部分であるが，「自性」の他に，「自体」が出てくる．ここでは，両者とも「それ自身」といった意味で使われていて，svabhāva の訳語としての「自性」等とは異なるように見える．「自性」が必ずしも「自らの本性」とか「本質」などを意味するわけではない一例である．

次のような使われ方もある．

11　豈に此の三は，語を性と為すが故に，声を用って，体と為して，色の自性に摂するにあらずや．如何ぞ，乃ち説きて，心不相応行とは為すや（p.413c)

この文は『倶舎論』梵本と対照することによって原語を知ることができる．「性」と「自性」が svabhāva であり，「体」は ātman である．これは「名・句・文」について論じているものである．「名・句・文の三は語を自性とするから，声を体とする．色を自性とするものではないか．なにゆえに心不相応とされるのか」という意味である．一つの文の中で，違う訳語が使われているが，意味は同じように見える．

『順正理論』における「自性」について検討することは，その大部分が原語不明なため，困難を伴う．『倶舎論』を対照させて検討することによって，ある程度明らかになる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4.「自相」

「自性」と関係の深い語の一つに，「自相」がある．原語は，多くの場合 svalakṣaṇa である．この二語が同じ意味で使われることがあるのは，既に指摘されている[7]．『順正理論』に出る「自相」を見てみる．

12　能持等の四業は即ち是れ界の自相とせんや．爾らず．云何ぞ．是の如き四界は，其の次第に随って，堅・湿・煖・動を以て自相と為す．応に知るべし．此の中，性を説いて体を顕す，体と性と相離れざるを明かさんが為の故なり．(p.336b)

四大種について論じている中に出るものである．大種各々の相と業の区別を説くものである．地・水・火・風に対して，その自相は堅・湿・煖・動であり，業（作用）は保持・包摂・熟成・増長とする．『順正理論』においては全て自相で統一されているのだが，『倶舎論』を見ると，「自相」と「自性」の両方が使われている．原語も svalakṣaṇa と svabhāva であり，漢訳もそれに応じてされている．意味は同じような意味であり，本質あるいは本性という意味であろう[8]．この点について，『倶舎論』に至るまで自性・自相・自体などの語の区別が厳密になされてなかったが，『順正理論』になるとこれらを厳密に区分して用いるようになった，とする論考がある．その原因は，内外からの論難・攻撃をまともに受けざるを得なかったことにあるという．そのため，説一切有部は，教理を深め，場合によっては変容せざるを得なかったのではないか，という[9]．ただし，『倶舎論』をみると，「自性」と「自相」を使い分けている箇所もある[10]．そこでは，五蘊・十二処・十八界以外に，蘊や処や界と呼ばれるものについて，含めるか，別なものとするか，について論じている．その中で，「自相（svalakṣaṇa）を考察した上で決めるべきである．」としている．その考察の結果，「…五解脱処は慧を自性（svabhāva）とするから法処に含まれる．…」とする．すなわち，「自相」を考察した上で「そのダルマは…を「自性」とする．…」としているのである．直接知覚出来るのが「自相」であり，その上で知られるのが「自性」である，と使い分けがされている[11]．

5．結語

以上，『倶舎論』と『順正理論』の「自性」について検討をしてきた．前者においては，まだ，「自性」という語の使われ方が曖昧であり，意味するところが明らかでないことが多い．それが，後者になると，より明確になってきている．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

それは，語の使用の仕方に出ている．「自性」という語は，他語に置き換えられることも多い．それだけ重要な語であるともいえる．今までに指摘されたように，有部の教義の発展に伴って，「自性」の概念も重要になっていったのである．それは，有部の教義の集大成をしたと言われる『倶舎論』とそれに対して，時として痛切な批判を加えた『順正理論』の比較によっても垣間見える．

1）梵本は，ed. P.Pradhan *Abhidharmakośabhāṣya* Patna 1967（AK）を使用．漢訳は，共に大正蔵巻29に収録されている，玄奘訳（新訳）と真諦訳（旧訳）を使用する．倶舎論注釈としては，ed. U. Wogihara *Abhidharmakośavyākhyā*（山喜房佛書林，1971年覆刻）（AKV）を使用する．なお，和訳として，櫻部建『倶舎論の研究』（法蔵館，1969年）（界品・根品），山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明　世間品』（法蔵館，1955年）（ただしチベット語からの訳），舟橋一哉『倶舎論の原典解明　業品』（法蔵館，1987年），小谷信千代・本庄良文『倶舎論の原典研究　随眠品』（大蔵出版，2007年），櫻部建・小谷信千代『倶舎論の原典解明　賢聖品』（法蔵館，1999年），櫻部建・小谷信千代・本庄良文『倶舎論の原典研究　智品・定品』（大蔵出版，2004年），村上真完「人格主体論（霊魂論）—倶舎論破我品訳註（一）—」『塚本啓祥教授還暦記念論文集　知の邂逅—仏教と科学—』（佼成出版社，1993年），「同（二）」『渡邊文麿博士追悼論集　原始仏教と大乗仏教』（永田文昌堂，1993年）等がある．翻訳は基本的にこれらによっており，部分的に手を加えている．　2）大正蔵巻29.　3）以下の記述は『倶舎論索引』による．また，木村誠司「『倶舎論』における svabhāva について」『仏教論集』第八号（駒澤短期大学仏教学科，2002年）参照．　4）櫻部建『佛教語の研究』（文栄堂，1975年）pp.72–77，平川彰『法と縁起』（春秋社，1988年）pp.122–134．また dravya については，佐古年穂氏によって倶舎論中の用例を挙げ論じられている（佐古年穂「倶舎論における dravya について」『江島惠教博士追悼記念論集　空と実在』（春秋社，2001年）pp.37–50.　5）槻木裕「「自性」と説一切有部の存在論」『橋本博士退官記念佛教研究論集』（清文堂，1975年）pp.273–287において論じられている．　6）宮下晴輝「倶舎論注釈書 Tattvārtha の試訳—第七章第一偈より第六偈まで—」『佛教学セミナー』第38号（大谷大学仏教学会，1983年）参照．　7）櫻部建前掲書 p.73，加藤純章「自性と自相—三世実有説の展開—」『仏教思想の諸問題』（春秋社，1985年）pp.487–509等．　8）木村誠司「『倶舎論』における 'svalakṣaṇadhāraṇād dharmaḥ' という句について」『仏教論集』第七号（駒澤短期大学仏教学科，2001年）参照．　9）吉元信行『アビダルマ思想』（法蔵館，1982年）pp.371–374，参照．　10）pratipādya yathokteṣu saṃpradhārya svalakṣaṇam（AK. p.17 l.22）．　11）平川彰前掲書 pp.122–134参照．

〈キーワード〉　自性，svabhāva，『倶舎論』，『順正理論』，説一切有部，自相

（大正大学綜合佛教研究所講師）

NII-Electronic Library Service